

カウンターカルチャーとしての旅

——社会運動のツーリスティックな側面を通じて

富永京子

This paper investigates how activists realize their social movement activity in the process of going their destination for tourism. Recently, scholars have shown increasing interest in the mobility of social movements because activists come to the protest arena from a long distance and stay in the protest area for a limited period of time. This can be considered as protest tourism by activists.

This study discusses accommodation and communication processes in the movements in Japan. Two key findings emerged: firstly, tourist protesters are politically socialized through the communication with others. Secondly, these type of tourists are not only politically socialized, but learn the manner and behavior which appropriate to the social movement community. This paper concludes that protest tourism plays an important role in creating solidarity in the era of individualization to share identity, experience, and behavior with other activists in accommodation and communication processes.

キーワード：社会運動，カウンターカルチャー，プロテスト・キャンプ，
バックパッキング・ツーリズム

1. 問題意識——社会運動のツーリスティックな側面

現代社会において、途上国支援や開発、環境問題を取り扱う NGO (Non-Governmental Organization) や、G20・G8 といった国際会議への抗議行動など、いわゆる社会運動の主題はますますグローバル化している。さらに 2010 年代に入り、「オキュパイ・ウォールストリート」と呼ばれる反グローバリズム運動を皮切りに、長時間都市空間を占拠するタイプの社会運動が世界各地で同時的に行われている。

メディアの進歩や移動手段の多様化は、端的に言えば、社会運動参加者による移動の広域化を可能にするという変化を引き起こし、「移動」にかかる時間や労力、お金といった資源量を考慮して運動に参加する状況を作り出すとも考えられる。そうした状況の中で社会運動に従事する人々は、国境を超えるか超えないかはともかくとして、自分たちなりの社会的理念を持った移動、政治的な意図に基づく滞在先でのアクティビティを有する、「ツーリズム」としての性格を持つ社会運動のための手段を講じつつある (松本 2016, Feigenbaum et al. 2013, Tominaga 2017)。

継続的に社会運動へと参加している人々の中には、例えば世界の何処かで行われる基地の建設反対運動や特定地域の占拠活動など、社会運動が行われる現地に向かい、そこでデモや座り

込み、提言活動を行う。さらにその過程において、フェリーやLCC (Low-cost carrier) による飛行機移動といったあまりお金の掛からない手段、あるいは電車の料金を支払わずに乗車する「キセル」やヒッチハイクといった手段を用いて向かう場合がある。その背景には、例えば大資本によって形成された交通システムへの抵抗や、排気ガスなどのエネルギー消費量を節約するために、観光プロセスのいたるところに政治的な意味を付与しようという意図がある。例えばそれは、食や宿泊、場合によっては衣服に関しても同じことだ。社会運動従事者は旅をする際、野宿であったり、現地の仲間たちが運営するシェアハウスやフリースペース、あるいは学生寮といった場所に宿泊する。ときには無添加・地元産の野菜や廃棄された食材を用いた料理を食べながら、従事者同士の交流を楽しむ (Harvie et al. 2005)。こうした旅行の中では、度々、金銭を使わないこと、貧乏に旅することへのこだわりや、役に立たない無駄な時間こそを楽しもうという運動従事者同士の提案が見られる (松本 2016, 杉村・境・村澤 2016)。このように、社会運動へと継続的に関与している社会運動従事者の人々は、単にデモやシンポジウムが行われる地に赴くだけでなく、そこに至るまでの過程をも「社会運動」として捉え、そこに意味を込め、楽しみや成長を見つけ出そうとする。こうした限りにおいて、社会運動参加者たちの移動は「観光」として捉えられうるものだろう。

では、目的地での活動だけでなく、目的地へ向かうための移動や滞在が社会運動のプロセスの多くを占めるようになり、社会運動の「観光」的側面が担い手自身によって認知され、自覚されることは、現代の社会運動においてどのような意味を持っているのだろうか。この問いに答えるべく、本研究は社会運動における移動や宿泊の過程、そこにおける社会運動従事者の振る舞いをツーリストティックな側面から捉えるために、社会運動論とツーリズム研究におけるバックパッキング・ツーリズム研究から探究してみたい。

2. 先行研究

社会運動をツーリストティックな側面から読み解くにあたって、本研究では二つの研究潮流を確認したい。第一に、資本主義や商業主義といった既存の社会においてマジョリティとされる価値観に対抗するカウンターカルチャーとしてのバックパッキング・ツーリズム研究である。この研究領域は、本研究の問題意識とも大きく重なる。第二に、社会運動において旅の過程そのものを研究対象とするプロテスト・キャンプ研究に言及する。二つの研究潮流から析出される論点を踏まえた上で、分析視角を形成したい。

2.1. 運動文化とオルタナティブ・ツーリズム——消え去った「カウンターカルチャー」的側面

観光研究において、社会運動を論じたものは数多くある。すなわち、旅行者が特定地域を訪ねて社会問題の深刻さを学び、自らの意識を変革することを目的とするようなツーリズムがある。例えば、住民が貧困に苦しむ地域を訪問し、その労働や居住の状況を学ぶための旅は、「スタディ・ツアー」「スラム・ツーリズム」あるいは「タウンシップ・ツーリズム」(Frenzel 2014) などと呼ばれる。

タウンシップ・ツーリズムは、不平等や貧困を抜きにしては論じられない点がある。実際に

Frenzel らは、タウンシップ・ツーリズムの主催者と観光客の側が相対的に高階層にあり、「見られる」者だけが低階層に属しているという事実を指摘してきた（Frenzel 2014）。見るもの（ゲスト）と見られるもの（ホスト）の関係がもたらす不平等性と、その二者における相互行為が人々へともたらす共感や衝撃こそが、タウンシップ・ツーリズムの最も重要な要素と捉えられてきた。だからこそタウンシップ・ツーリズム研究は、基本的にはどのように旅の前後で居住地域に対する態度や関心を変えたのかということの問題意識としている（Rolfes et al. 2009）。しかし、本研究が明らかにしたいのは、特定の地域がもつ特性や、そこに訪れる人々と現地の人々の相互作用ではない。あくまで、政治的な理念や目的を持って旅をする人々が経験する、移動手段や滞在場所も含めた旅のプロセスそのものなのである。それを踏まえ、より旅の「過程」にフォーカスしたものを主要な先行研究とした。

政治的な価値観に基づき、宿泊先や目的地、移動手段を決定するタイプのツーリズムとして「バックパッキング・ツーリズム」がある。1960年代におけるヒッピー・ムーブメントから派生して生まれたバックパッキングは、他ならぬカウンターカルチャーを旅という形で体現した活動であり、マス・ツーリズムに対するオルタナティブな実践でもあった。航空会社の発行する旅券を持ち、誰もが知っているメジャーな観光地に行き、大資本の提供するホテルに泊まる——という「マス・ツーリズム」に対して、Cohenは誰にも知られていない場所に行き、現地のライフスタイルに埋没し、住民たちとのふれあいを通じて現地の文化を知るという「オルタナティブ・ツーリズム」としてのバックパッキング・ツーリズムを提示した（Cohen 1987）。

さらにPearceは、バックパッキング・ツーリズムの特徴を「低予算での宿泊」「地元民や他のバックパッカーとの社会的相互行為」「柔軟な旅程」といった旅自体の特質とともに、旅行者は「すぐに立ち去るよりは、長い期間の滞在を志向する」「行き先での非公式な旅行行動に参加する」「リスクの高い『冒険』を渴望する」「比較的若い人々によって担われる」といった志向をもつと指摘している（Pearce 1990）。

しかし一方で、カウンターカルチャーに基づく政治的な活動であったはずのバックパッキング・ツーリズムも、時が経つにつれ大きくその性格を変容させることになる。TingとCarlは、そうした変容を「新しいバックパッカーたちの台頭」として以下のように論じる。新しいバックパッカーたちは、本来資本主義や商業主義、消費社会への対抗といった性格を有するはずのバックパッキング・ツーリズムを、むしろ自己変革・自己啓発のための行動として位置づけるようになる。それまで踏み荒らされていない、資本主義や商業主義によって価値が与えられない場所や地域に対する「オルタナティブな価値」を付与するために行われていた旅を、新しいバックパッカーたちは「従来の観光では経験できない、自らのオリジナルな体験」をする機会として捉える。ここでバックパッキングは、その土地における「真正性」を見出したり、マス・ツーリズムによって訪れることや観ることの出来ない、新しい土地を見つけ出すことを必ずしも主たる目的としてはいない。それはあくまで、普段とは異なる風景に囲まれて行う「自分探し」の一環なのである（Cohen 2003, Ting and Carl 2016）。

こうした議論は日本のバックパッキング・ツーリズムにも見出すことができる。大野哲也は日本人バックパッカーに対する調査研究を行い、本来資本主義に対するカウンターカルチャーとして存在していたバックパッキングが、資本主義社会に適合するキャリアアップのための「資

源」として語られている状況を指摘している（大野 2012, 2007）。さらに、バックパッカーたちの相互行為には、一種の「規範」や「作法」が見られる点を大野は指摘している。バックパッカーたちは、どれほど遠くに行ったか、何カ国旅をしたか、旅でどのような希少な・危険な体験をしたか、というヒエラルキー付けをしているのだ（大野 2012: 118）。例えば同じ場所に行くにせよ、飛行機で安全に向かうのではなく、時間がかかっても船や陸路で安く行くことが望ましい、といった具合にである。その根底には、リスクを冒すことこそが真正な体験であり、そうした体験こそが日本に帰った際に、自己の成長や社会的地位の上昇へと繋がる、という前進主義的価値観にもとづいているのだと解釈されている（大野 2012: 142）。

一方、山口誠は日本のバックパッカーを「第一世代」「第二世代」「第三世代」と分類することによりバックパッキング・ツーリズムの変遷を説明する。山口は、1970年代に現れた日本人バックパッカーが「長期・低予算・周遊」の三大特徴を持つ欧米発のバックパッカーの影響を受け、『地球の歩き方』を参考に「旅先の日常生活に文脈化しようとする『歩く』旅」（山口 2010: 82）を自己目的化する「第一世代」とする。一方、1980年代のバックパッカーたちは、沢木耕太郎の『深夜特急』に代表されるような『『ここではないどこかへ』と自分探しの旅を志向する、第二世代』（山口 2010: 145）であり、第二世代の人々は既存の社会に対するカウンターやオルタナティブを志向するものではないと見なしている。では、1990年代のバックパッカーたちは何を目標としたのか。第二世代の「自分探し」に見られたような、社会と自分の対立は第三世代にはすでにない。1990年代の若者たちは、『『わたしたち』あるいは『われわれ』という集合的アイデンティティを前提として出発する旅』（山口 2010: 169）を志向する、「海外で日本を生きる」日本人性を強く意識していると論じている。

大野は、自己の成長と社会的地位の獲得を、山口はナショナリティと自分探しをバックパッキングの目的だと論じた点で異なるものの、基本的にはバックパッキングが、政治的目的やカウンター・オルタナティブのための「政治」的な旅から、「自分探し」の旅へと変遷した過程を描いていると言えよう。では、現在においてバックパッカーが忘れてしまった「政治的な目的」に支えられた旅は、どのような場で成立しうるものなのか。次節では、「プロテスト・キャンプ」という、普段から社会運動に従事している人々が寝食をともにしながら旅するタイプの社会運動に関する研究を参照したい。

2.2 プロテスト・キャンプ研究——社会運動論における「文化」

社会運動論にもまた、社会運動における旅の過程を対象とする研究がある。それが、「プロテスト・キャンプ」研究である。2011年にニューヨークで行われた「オキュパイ・ウォールストリート」を皮切りに、世界中である期間ある場所を占拠しながら人々が寝食をともにするタイプの「オキュパイ・ムーブメント」と呼ばれる行動が世界各地で見られるようになった（Gerbaudo 2012）。もちろんそれ以前にも、空き家を占拠して行う「スクワット」と呼ばれる活動や、国際的閣僚会議への抗議のために、会議が行われる現地で数日間滞在する活動が世界各地で存在し、こうした活動をライフスタイルの視点から捉える研究も近年数多く見られる。例えば、Feigenbaumらは、ある場所に滞在し、社会的な再生産の行為をその中で行うことによって日々の暮らしそれ自体を社会運動の戦略とすることを「プロテスト・キャンプ」として定義した

(Feigenbaum et al. 2013: 11)。

ここでいう「社会的再生産」とは、「日々の生活を送るために必要とされるインフラストラクチャーや実践」(Feigenbaum et al. 2013: 47)として定義されるが、具体的には食事や調理、食材の調達 (Graeber 2009; Glass 2010)、あるいはトイレや寝室といったインフラストラクチャーの設営 (Harvie et al. 2005) が取り上げられる。例えば食事であれば、肉や魚よりもヴィーガンがよいとされることもあるが、一方で先住民族の食習慣に敬意を表して敢えて肉食を勧める場合もある (成田 2008, 富永 2016)。トイレや寝室は一定期間、人々が同じ場所へと滞在するにあたり重要なインフラストラクチャーだが、そこにもやはり性や衛生観念、あるいは環境保護といった課題が関与する。例えば日本におけるプロテスト・キャンプでは、「男」「女」と分けて設置したトイレに対し、海外の参加者が異議を唱えたため、参加者全員で議論した後に第三のトイレを設置したという (Tominaga 2017)。

時代によって志向に変化がみられたバックパッキング・ツーリズムとは異なり、プロテスト・キャンプは1960年代から現代にかけて、その表面的な性格に大きな違いはない。しかし、その背景にある理論自体は大きく変化している。1960年代のプロテスト・キャンプや、バックパッキング・ツーリズムの背後にあるヒッピー・ムーブメントを支えていた理論は、「新しい社会運動論」であった。新しい社会運動論は、それまで主流と言われていた労働運動に対して、オルタナティブな生き方や新しい価値観を求める運動である (高田 1986, Melucci 1985 など)。ここでは、寝食をともにしつつ多くの人が場を共有して行う活動は「コミュニティ」に代表されるような、統一されたライフスタイルや価値観に彩られるものとして議論されてきた (Kanter 1973)。

その一方で、現代のプロテスト・キャンプは担い手の多様性を強調する。グローバル化は、性別や民族、職業や出自が多様な人々が同じ場で社会運動を行う状況を生み出した。そうした状況において、プロテスト・キャンプは「コミュニティ」のように制度や規範によって形成される継続的な場とは限らなくなる。Kevin McDonald は、現代の運動に見られるプロテスト・キャンプを「経験の共有」の場として論じた (McDonald 2006)。個人化・流動化するライフコースやライフスタイルの中で、人々は予め定められた組織的枠組や、統一された目的や組織を通じて運動することができない。実際に社会運動の担い手たちは、全く異なる経緯からプロテスト・キャンプに参加する。しかしその中で、それぞれに違う技能や知識を活かしながらキャンプの中で生活のための共同作業を行い、お互いのことを理解し合うのである。McDonald は自らの提唱する「経験運動」概念において、個人化・流動化する社会の中では、そういった相互理解のプロセス（「経験の共有」）自体が社会運動となり得ると主張したのだ。

バックパッキング・ツーリズムの論じた「社会への抵抗から自分探しへ」という変化とは幾分異なるものの、社会運動論もプロテスト・キャンプを通じて社会運動の変遷を論じている。それは「新しい社会運動から経験運動へ」という変容である。具体的には、統一された作法や振る舞いを遂行することで、所与の規範や理念を実現する「手段」としてのプロテスト・キャンプから、それぞれ異なる背景を持つ個人が共同作業を通じてお互いを理解するという「目的」としてのプロテスト・キャンプへ、という変化である。

しかし、ここで一点疑問が生じる。対抗する価値がもはや明示化されず、バックパッキング・

ツーリズムが「自分探し」化してしまった現代において、プロテスト・キャンプのように政治的な目的を持つ旅がそもそもなぜ可能となっているのか、という点である。バックパッキング・ツーリズムが資本主義や消費社会という対抗すべき価値を消失しているなら、同様にプロテスト・キャンプもただの「キャンプ」「お祭り」としてしか消費され得ないはずだ。しかし先行研究によれば、参加者たちは、たしかに旅を彩る諸要素、例えば寝食に「ジェンダー規範への抗議」や「環境保護」といった政治的理念を込めている。そこで本稿は、カウンターカルチャーとしての色彩が旅から薄れつつある時代に、社会運動従事者たちがどのようにして他の担い手との寝食や活動を政治的たらしめているのか、バックパッキング・ツーリズムの視点を借りながら論じることで、現代社会において政治的理念が“旅”として行われるメカニズムを解明したい。

3. 調査対象と研究方法

先行研究の知見を踏まえて、本研究は、明確な政治的目的を持ち、個々のライフスタイルやインフラストラクチャーに意味を付与しながら旅をする人々を対象とする。しかし、具体的にどのような行動や意味付けについて検討するのが適切だろうか。本稿では社会運動のツーリストイックな側面を検討するために、先行研究が指摘したバックパッキング・ツーリズムの特徴としてみられてきた諸要素が、社会運動従事者たちの「観光」過程においてどのような様相を示しているかを明らかにしたい。Pearce と Cohen は、バックパッキング・ツーリズムの定義として、「宿泊・交通費が低額」「柔軟な旅程」「他の旅人や地元民との社会的相互行為を志す」といった点を共通して指摘した (Pearce 1990: 30, Cohen 2003: 97-98)。本稿も、基本的にはこの三点を満たしながら、政治的な目的・意図を持ちつつも、社会運動を行う過程において「観光」を楽しむ人々の事例研究を行いたい。

本章では分析の焦点を「交通・宿泊」「旅程」「他者との相互行為」に絞り、社会運動従事者たちの旅において旅費が低額であったり旅程が柔軟であるのかどうか、そうでないとしたらなぜなのか、という議論を行いつつ、従来のバックパッキング・ツーリズムと社会運動従事者たちの旅の間にある異同を論じ、現代における旅の「政治性」がどこに宿るのか検証したい。

対象者は、社会運動参加という目的を有して居住地から目的地へと移動しつつ、その目的を果たすだけでなく、周遊し寄り道する人々である。中でも、「安価な宿・移動手段」「柔軟な旅程」「他の旅人との社会的相互行為」といった要素をある程度満たした旅についての語りを参考にした。インタビュー対象者は24名(女性9名、男性15名)であり、彼らのインタビューデータ、旅行記・SNSの書き込みを主として分析した。ここで一点注意しておきたいことだが、バックパッキング・ツーリズム研究の多くが海外を事例としており、この点は日本の研究においても同様である(大野2012, 山口2010)。しかし、国際的な移動を含む社会運動には入国管理や逮捕といった法・制度上の課題がつきまとうため、旅自体が従事者の意図通りに遂行されない可能性がある。今回はあくまで、現代の旅において政治的な理念がいかに反映されるかを問うものであり、意図通りではない要素はいったん分析の外に置く必要があると考えた。そこで、おもに「日本国内」を旅した人々が行った、移動・宿泊・目的地(中継地)でのアクティビティに照準を絞って検討したい。

プロテスト・キャンプをツーリズムとして捉えた時、その中で実現されるライフスタイルはすべて「社会運動」とみなされる。では、バックパッキング・ツーリズムが特に強調した「低予算での移動・宿泊」「地元民や他のバックパッカーとの社会的相互行為」「柔軟な旅程」という点については社会運動の旅においてどのような意味づけをされるのだろうか。次節では、この三つの活動に即して、人々の旅を分析していきたい。

4. 事例研究——社会運動従事者による抵抗と連帯の旅

4.1. 移動——「安さ・手軽さ」と「規制・規範への抵抗」

移動手段と宿泊の場がなければ、社会運動従事者たちの旅ははじまらない。多くの運動従事者たちは、事実はどうあれどちらかと言えば「貧乏」（松本 2008）であり、資本主義社会に適合していないという意味で「だめ」（神長・長谷川 2000）といった形で自らを語る。だからこそ、移動手段に関しても、体力的に負荷が多く、所要時間が長くなったとしても、比較的安価なものを選ぶことになる。

聞き取りのデータに基づき、長距離の移動は「フェリー」「夜行バス」、比較的短距離の移動は「自動車・バイク」「ヒッチハイク」「電車」といった手段を組み合わせて用いることが多いようだ。また、例えば岐阜から名古屋までバイクで移動し、名古屋から仙台までフェリーに乗り、宮城県内をバイクで異動するというやり方を取る人々もいる。以下は、京都で行われているおもしろそうな社会運動の情報を目にし、当時住んでいた札幌から京都に向かい、さらに名古屋を経由して横浜へと向かった A1 氏の語りである。

A1：京都の活動がおもしろそうだったので、「これは行くしかない」と思った。小樽から舞鶴までフェリーで行くのっていくらかかるか知ってます？学割で 7200 円なんですよ。（値段が）安いじゃないですか、安いから、「何をしたい」とかじゃなくて、「行くしかない」と思って、フェリーに乗って出発して、（ユニオン）エクスタシーの「くびくびカフェ」っていうところに行きました。（中略）京都に滞在した後に大阪の釜ヶ崎に行ったりとか、後は、名古屋に行って「氷河期世代ユニオン」の B さんとか、名古屋の C さんっていうおっさんが京都に来てて、その（人たちが参加する）イベントが色んな所を回るらしくて、京都行って大阪行って名古屋に行って、っていう（スケジュールで）「車で移動する」っていうから、「大阪から名古屋行く所で乗せてくれ」って言って（乗せてもらった）。とにかく何が言いたいかっていうと、その辺りの期間ですごい色んな人と交流して、色んなことをした。¹⁾

「くびくびカフェ」とは、非正規雇用労働者の人々が中心として運営していた団体「ユニオンエクスタシー」による、都市空間を占拠して宿泊や飲食、議論をともにする社会運動であった（2017 年現在はすでに解散している）。その運動に合流したい、と願い始まった A1 氏の旅は、まさに「低予算での移動・宿泊」をしており、その中で「他の旅行者との相互行為」が豊富に見られる。さらに、その交流に基づく「柔軟な旅程」を有している点で、「観光」としての色合いが強い社会運動であると言えるだろう。

A1氏が移動手段を選択する理由は非常に明快だ。「安いから」「お金使いたくないじゃないですか」²⁾と、基本的には安価である点を理由としている。加えて、「色んな人と交流して」という発言や発言内に出現する様々な人の名前を見る限り、交流や楽しさへの志向も見逃せないものだろう。実際に、安価な手段ということであれば知人の車に同乗するのもヒッチハイクも変わらない。多少お金を出せば、在来線や夜行バスなどもある。彼は大阪から名古屋までの車が「僕を除く(同乗者)4人が体重90キロ位で、本当に地獄絵図的な展開だった」³⁾と、必ずしも快適ではなかったことを語っているが、それでもなお他の旅行者との交流やそこから生まれる新しい情報や視野の獲得は、かけがえのないものと解釈することもできる。この点は、次節でまた言及したい。

長距離になればなるほど経路の選択手段は限られてくるが、そこで好まれるのが、A1氏も言及していた「フェリー」である。フェリーを通じて、安価さや手軽さといった要素とは異なる「こだわり」が見えてくる。例えば参考聞き取りでは、「バイク積めるから、その後色々(な目的地に)行ける」「電波が通じないので何も出来ず、何もない時間が満喫できる」⁴⁾と回答する人々もいた。また、飛行機では持ち込みが制限される手荷物なども持ち込めるため⁵⁾、好んで乗り込む人も見られた。

ここでもう一点、安価さ・手軽さに加えて、社会運動従事者たちが倫理や規範、場合によっては法律から逸脱することに対して抵抗がない姿勢を持っていることに注目しておきたい。例えば、飛行機への持ち込み制限手荷物の中には、所持が奨励されないような飲食物や嗜好品なども含まれる場合もある。しかし運動従事者の中には、そのような物品を持つことに抵抗がなく、むしろ所持することによって管理社会や資本主義への抵抗を示す人々もいる。Graeberによるライフスタイル運動の研究は、アナークストたちが大規模スーパーマーケットから万引きや廃棄品の無断拾得をしながら食料を調達するさまを明らかにしたが、それもやはり単なる節約のための行動ではなく、消費社会や資本主義に対する抵抗に裏付けられたものなのだ(Graeber 2009)。規範や倫理に対する遵守志向の薄さは、社会運動従事者だけでなく現代のバックパッカーにも同様に見られる傾向である(大野 2012, Ting and Carl 2016)が、社会運動従事者は、現代のバックパッカーが主張する、自分探しのための「冒険」や「真正性」にふれるために逸脱した行為を行うのではない。あくまでマジョリティ的な価値観や支配的な社会システムへの抵抗であり、規制・規範への抵抗や管理社会への抗議として、大企業や政府の目を逃れるような行為をするのだと考えられる。

つぎに、宿泊場所に関する議論へと進みたい。宿泊も移動手段と同様に、やはり安価さが求められる。本稿で聞き取りを行った多くの人々はホテルではなく、同じく普段から社会運動をしている人々のシェアハウスや自宅に泊まっていた。実際に社会運動に普段から従事している人々が運営しているシェアハウスの場合、Twitter上や雑誌記事、ミニコミ誌において「短・中・長期の滞在や宿泊可能です」⁶⁾「いつでも来て、寝たり食べたり飲んだり話したりしてください」⁷⁾といった、客人を歓迎するような文言を提示することは少なくない(増井 2015など)。また、長年継続的に運営されており、海外や地域外からの来訪者が多いような社会運動コミュニティであれば、ゲストハウスを設営している場合もある(松本 2016)。また、期間限定であっても、世界中から参加が見込まれるような大きな社会運動を行う場合は、運動が行われる地域で社会

運動をしている人々がキャンプなどを設置することも多い（国際交流インフォセンター／キャンプ札幌実行委員会 2008 など）。

社会運動従事者によるシェアハウスが全国で運営され、来訪者に開放されており、また旅人もそこを利用する理由は、もちろん安価で宿泊地が提供されるという理由もあるが、基本的には社会運動に積極的に参加する人々が、他の従事者との「交流」に重きを置いているためと解釈できるだろう。上述したA1氏の語りに見られるとおり、普段は出会わない人と出会い、情報や知識を手に入れることこそ、人々が社会運動を続け、政治的な関心を保つ糧となると考えられる。そこで次節では、宿泊地で行われる「相互行為」を検討していきたい。

4.2. 相互行為——触発される運動従事者、伝播する社会運動

社会運動従事者たちは、デモやシンポジウムと言った社会運動の現場の中だけでなく、宿泊先のシェアハウスやゲストハウスの中で、普段交流している人々とは異なる地域から来た、異なる問題意識を持つ人々と交流する。こうした交流自体が、普段から行っている運動に対して新しい戦術や問題の伝え方といった「新しい風」を吹き込むことは、先行研究でも数多く指摘されてきた（Wood 2012, McCurdy et al. 2015）。

実際にどのようなコミュニケーションを通じて、運動従事者たちは他の担い手から新たなアイデアやインスピレーションを得るのだろうか。ここで、札幌から東京へと旅をしたA2氏とA3氏の語りを紹介したい。二人は札幌で行われる大規模な反グローバリズム運動イベントの宣伝をし、多くの人に来てもらうための「インフォツアー」（Higuchi 2012）をするため、東京・高円寺に滞在することになった。A2氏とA3氏は本来の目的を果たしつつ、高円寺に居住する運動従事者たち（D君たち）と余暇を過ごしなが、彼らの雰囲気には惹かれていく。

A2：（東京に）行って、D君家に遊びに行つて。朝の6時ぐらいまでさんざん酔っ払つて遊んでね。その時にね、我々ラジオに出てるんですよ。インターネットラジオにね、ベロベロになって。次の日彼の妹が働いている東京デイズニーシーに行く予定を組んでたんで、結構、息（が）紫色だったよね。二日酔いとかじゃなくて。D君家からまっすぐ酔っ払った状態で行った。

A3：夢の国なのに。ワクワク感満載な中さ、我々だけ紫色の煙が出てて。（その後）高円寺のインターネットラジオ（に出た）。「北海道で反グローバリズム運動の）イベントを（開催しよう）と考えてる。これはもう来るしかない」っていう話をしてたよね。適当なことをベラベラベラって喋ってた。ひどかったよね。

A2：だから、D君たち（高円寺の人々）から学んだのは、エンジョイレジスタンスじゃないじゃないですか。だから私がD君とかがすごく楽しく（思えて）共感出来たのはさ、本人達が楽しんでるんですよ。なにが一番大事かって、社会に何か言おうとか、みんなに気づいてほしいとか、そんなこと一切何も思わなくて、自分が楽しいと思ってることをやってたら、やっぱり皆（イベントに）来るんですよ。だからそれが一番大事なんじゃないかな。なんか、あんなの見てたらさ、誰だって「面白そうだな」って思う。

A3：あれは凄い才能だよ。天才だと思う。面白いけど、インテリジェンスを感じるよね。

一貫したバカだよね。ポリシーがあるからね。⁸⁾

A2氏とA3氏は、「D君」の家に泊まり、「さんざん酔っ払って遊んで」、「ディズニーシー」に行きつつ、インターネットラジオに出ることになる。本来の旅の目的である宣伝を果たしたが、「酔っ払った」状態で出たそのラジオは「ひどかった」という。しかしそれでも二人は悪びれたり反省する様子はまったくなく、むしろいい思い出として語っている。このインタビューの中で、A2氏とA3氏は社会運動が「真面目じゃなくてもいい」こと、「適当でいい」という自身の理念を強調している⁹⁾が、引用した語りによる限り、これはA2氏とA3氏が「D君たち」から学んだ一つの要素だと言えそうだ。彼らは「エンジョイレジスタンス」「自分が楽しいと思ってること」を重要視するが、それは「ディズニーシー」に一緒に行き、「酔っ払って遊んだ」交流の中で得たものだと言えるだろう。

もう一つ、A5氏の場合を見てみよう。A5氏もまた、A1氏と同じく魅力的な社会運動へと合流するために、野宿とヒッチハイクを繰り返しながら旅を行う。目的地であった「E大学」で、「スクウォット」(占拠活動)という社会運動のあり方を学ぶことになる。

A4: スクウォットっていうのを初めて知ったのは、E大学のF(運動団体)。E大にある日遊びに行ったところ、「F」が占拠した学内のスペースがあるっていうことで、行ったんですけど、そこがすごく面白いところで……何が面白かったかっていうと、あそこE大生もいたんですけど、普通の市民とかあとたまたまそこに行き着いた旅人とか、他大生とか、そのスペースの噂を聞きつけた失業者が全国から。もともと非常勤の図書館職員がクビになって、そのクビは不当だっていうことを主張するためのカフェだったんですけど、しばらく経つと、減茶苦茶いろんな人たちが交流する場になっていて、それがすごく面白いなど。「スクウォットっていいな」って思って、それが春休みだったんですけど。実際帰ってきて、自分の大学でもできそうな場所をずっと探していて、実際に作ったんです。¹⁰⁾

彼は旅先での相互行為を通じて、人々が「交流」する場そのものに強く惹かれたと語る。滞在したスクウォット・スペースが、社会運動家だけでなく、地元の人々や大学生も自由に参加できる場であることに感動したA4氏は、実際に自らの通う大学でも同様の場所を作り上げようとする。A2氏やA3氏のように、社会運動に対する態度や姿勢の点で影響を受けたわけではないが、彼もまた確かに旅先での相互行為から、さらに具体的に言えば相互行為が可能になっている場に触れることで刺激を得た人物の一人である。

ここまで、移動手段の選定理由や宿泊地を通じた相互行為を検討してきた。日常生活を営む中で、人々との交流を含む旅先での特異な体験を「資源」化するという旅行者たちの振る舞いは、日本のバックパッキング・ツアーにおいても見られたものだが(大野 2012)、社会運動従事者が「資源」化する体験は、バックパッカーたちとはやや異なる。大野は、就活や転職の面接などで語るための資源としてバックパッキング経験が機能し、それが就職やキャリアアップに繋がられるという点での資源化を論じた。しかし、本稿で検討した社会運動従事者たちは、あくまで旅先での経験を日々の社会運動に活かそうとしている。社会運動へと継続的に参加する人々が

旅から学んだものは、いかに日常の中で社会運動を継続するか、どのようにクリエイティブな社会運動を創っていくかということであり、例えば「適当でいい」（A3氏）姿勢を日々の仕事に活かしたりはしないし、「スクウォット」（A4氏）スペースの中で得た知識をバイトや就活の面接で話したりはしない。

つぎの節では旅程について論じるが、A1氏やA2氏・A3氏の語りを通じて、社会運動従事者たちの旅は、日程や目的地を柔軟に変更していることが分かる。例えば、A1氏は京都に向かうだけだったはずが、途中、イベントに登壇する人々と合流したことで名古屋へも足を運んでいる。A2氏・A3氏は自らがオーガナイズする社会運動イベントの集客を行うはずだったが、ディズニーシーにも立ち寄ることになった。運動従事者たちは目的地を目まぐるしく変えることで、観るものを増やしたり変更したりもする。では、その「観るもの」「すること」は、彼らの政治的理念をどのように反映しているのだろうか。次節では、「観光」の目的地を検討しながら、旅する社会運動従事者たちが柔軟に旅程を変更しつつも、一方では作法や規範に則って旅程を決定していることを明らかにしたい。

4.3. なにを「観る」のか——インフォショップから六本木ヒルズまで

社会運動従事者たちの当初の目的は、ストライキ活動への参加やシンポジウムの登壇、デモへの合流や他の担い手との交流など多岐にわたる。中には、今まで活動していた社会運動のコミュニティから、人間関係や仕事の関係でいったん離脱を余儀なくされたために旅を余儀なくされた人々も存在する。

社会運動従事者は何日間、何週間、何ヶ月間といったスパンで旅をし、その旅の日程は出会った人々や移動手段の変更によって柔軟に変化する。しかし、目的地がなければ旅とは言えず、また、そこでのアクティビティが彼らの政治的理念と合致していなければ社会運動として旅を捉えることも困難になるだろう。A5氏は、ある地方都市に在住している女性だが、当時関与していた政党の業務で東京へと向かうことになった。その隙間時間を使いながら、東京に存在するさまざまなスポットに向かおうとする。

A5：V党のイベントで「Eさん（国会議員）と行く東京ツアーがあるから（スタッフで行かない？）とか言われて、「あ、ラッキー。東京に行ける」とか思って、V党のツアーに行きたんだよね。（そのツアーの）残りの時に「IRA（Irregular Rhythm Asylum）」とか「素人の乱」に行って。「結構使えるな、V党」とか思ったりした。

（そういった場所の存在は何で知りましたか。）

A5：多分、もともと地元でもいろんな市民集会とかに行ってるから、そういう市民活動関係のメーリングリストとかに沢山入ってるから。あと、（旅行の途中、）いろんな所でいろんなチラシもらって、それを参考に他の所に行ってみたいして。いろんな人と会っている話をしたりして、それで帰ってきたんです。

（どういったチラシですか？）

A5：あんまりチラシはなくて、口コミが多いけど、『TOKYO なんとか』（の影響）はあるかな。¹¹⁾

「IRA (Irregular Rhythm Asylum)」とは、国内外から社会運動従事者が集まり、国際的な社会運動の情報が集まる「インフォショップ」¹²⁾と呼ばれる場所のひとつであり、「ジン」と呼ばれるミニコミ誌などが販売されている。「素人の乱」は、東京都杉並区にある、リサイクルショップやバー、ゲストハウスなどによって成立するコミュニティであり、普段から社会運動に関与している人々の出入りも多い。いずれも、言わば東京の「社会運動の名所」というべき場所である。

これまでの語りにも、「おもしろい社会運動」や「社会運動の名所」に言及する人々がいた。普段から社会運動をしており、魅力的な人々との出会いや交流を好む社会運動従事者たちが、こうした場所に惹きつけられることは容易に想定できるが、ではどのように「社会運動の名所」に関する情報を知るのだろうか。この問いに対して、A5氏は滞在先での「口コミ」に加え、「メーリングリスト」「チラシ」といった媒体を挙げている。彼女が具体的に名前を挙げている『TOKYO なんとか』¹³⁾は東京を中心に配布されているフリーペーパーであり、東京の社会運動従事者が運営しているスペースや居酒屋、インフォショップの情報が記載されている、バックパッカー向けガイドブックの社会運動版と言ってもいいかもしれない。こうした媒体を参考に、運動従事者たちは、口コミや明文化された情報を頼りに、同じく社会運動に関与する人々が集まりそうな場所、情報があそうな場所を目的地・中継地として旅を続けるのである。

しかし、A2氏とA3氏における「ディズニーシー」のように、人々が普段から従事している社会運動の理念とは直接的に関係ない場所が「目的地」として選定されることも度々ある。こうした場所が目的地となることは、どのように旅の中で正当化されるのだろうか。ここで、大阪を出て、東京の社会運動従事者が運営する事業所で働きながら、短期的に滞在しているA6氏とA7氏の語りを見てみよう。

(筆者：東京って滞在費は高くないですか？あまり感じないですか？)

A6：僕はここ（運動団体）で売ってる弁当を食って事務所に泊まってるから。仕事中、交通違反で6000円取られたくらいですね、まだ。でも古物市場はお金使っちゃう。行った方がいいって、おもしろいから。あれはおもしろいわ。金使いすぎちゃう。

A7：この間行った六本木ヒルズは？映画観たお金。（彼は）六本木ヒルズに行ったらいいですよ。六本木ヒルズで。（笑）

A6：あれは優待券。もらった優待券だから。

A7：A6さ、言ってたよね。「やっぱああいう所で観る映画は違うなー、フワーッといい匂いするし……」（と言ってた）。

A6：コマーシャルなことはそれはそれで重要やん？現状ああいうの（価値観）が支配的なわけやからさ。一般的なことは大事にしていって。¹⁴⁾

A6氏とA7氏のコミュニケーションは、20代や30代の男女が行う話としては不自然なところはなにもないだろう。ふたりは東京への滞在中、事務所で手伝いをしながら過ごしているが、たまに「古物市場」や「六本木ヒルズ」といった場所で余暇を過ごす。若者の趣味としてはややマニアックな部類かもしれないが、A6氏は古物市場に行って競りに参加する。また、六本木ヒルズで映画を観たりする。

しかし、A6氏が「六本木ヒルズ」という「コマーシャル」で「支配的」な場所に行き、映画を楽しんできたことに対して、A7氏はやや揶揄的で、からかうような態度をとっていることは、A6氏による最後のエクスキューズからも分かるだろう。こうした、社会運動らしからぬ場所、マスカルチャーや商業主義的な文化に属すると考えられる場に行くこと、自らの政治的理念と反する場所へ向かうことを揶揄したり、望ましくないとする態度は、他の社会運動従事者の言動にも現れている。例えば「米軍基地のお祭りに誘われて断った」¹⁵⁾ といった語りや、替えの衣類を必要とするからと言って「ユニクロで服を買う」¹⁶⁾ ことを避ける姿勢などは、それに近いものだろう。

A5氏やA6氏・A7氏らの語りから社会運動従事者が他の担い手とのコミュニケーションや、ミニコミ誌、メーリングリストといった媒体を通じて「行くべき場所」「行くべきでない場所」を共有する態度が垣間見える。A5氏は、『TOKYO なんとか』やメーリングリストを通じて「IRA」や「素人の乱」に行くのが望ましいと解釈し、A6氏は、A7氏とのコミュニケーションを通じ「六本木ヒルズ」に向かったことに対するエクスキューズを行う。

人はそれぞれに「社会運動らしさ」を旅の随所に込め、その「こだわり」や「しきたり」は他の旅行者との相互行為や情報媒体を通じて共有される。その中でゆるやかに行くべき場所と行くべきでない場所が共有される。さらに言えば、こうした「行くべき場所」に向かうためには様々な経路があるものの、社会運動従事者たちは自らの理念と資源的制約を踏まえて移動・宿泊するため、自ずと選ぶことのできるルートは限られる。こうした制約とこだわりの中で、社会運動のための旅のルートは定型化されるのではないか。

5. 考察と結論

本稿は、バックパッキング・ツーリズムと社会運動論の知見を用いながら、「安価な宿泊」「他者との社会的相互行為」「柔軟な旅程」を社会運動のツーリストティックな側面を分析する際の事例とし、それぞれに対応する要素として移動手段・宿泊地・目的地を軸に社会運動従事者による「観光」を検討してきた。そこで見いだされたものは、社会運動従事者たちが自らの政治的理念や遵法（ときに脱法）意識を持ち、それを他の担い手たちと共有しつつ、具体的な場所や経路へのこだわりとして反映させ、社会運動としての旅を形成していく過程であった。このように、旅人たちが特定の規範や望ましさを形成するあり方は、バックパッキング・ツーリズムにおいても見られたものだ。例えば大野は「空路より陸路」という規範を論じ（大野 2012）、山口は『『地球の歩き方』を読むのは初心者』といった、バックパッカーが形成した「望ましさ」に触れている（山口 2010）。これと同じく、本稿で分析した社会運動従事者たちは、ほかの担い手との相互行為を通じ、「真の社会運動における旅」と「そうでない社会運動における旅」を弁別している。

一方で、社会運動従事者たちの行動にみられるツーリストティックな側面は、バックパッキング・ツーリズムと明確に異なる点もある。現代に近づくにつれ「自分探し」としての性格を強めてしまい、対抗性や政治性を薄めてしまったバックパッキング・ツーリズムとは異なり、旅をする社会運動従事者は、政治的理念を持って移動し、その中で他の旅人と交流しながら、その成

果を普段の生活や社会運動へと反映させる。そうした点で、社会運動に従事する人々の旅は、バックパッキング・ツーリズムが失った「対抗性」を保持しているように見える。その中で望ましい目的地・移動手段・アクティビティとそうでないものは、従事者たちのこだわりやしきたりに沿って、暗黙のうちに弁別されているのだ。

こうした弁別は、バックパッキング・ツーリズムだけでなく、あるべき巡礼とそうでない巡礼を区別した宗教巡礼にも見られる（岡本 2012, 2015）。では、このように「あるべき」と「そうでない」、「真の」「偽りの」ツーリズムが同じ信仰なり政治的志向を持つ従事者の相互行為を通じて形成されるという事実は、何を意味しているのだろうか。「旅」をする社会運動の担い手たちが他の従事者たちとの交流や「あるべき観光」のすがたを強調する理由は、個人化・流動化によって細分化された価値観を改めて旅を通じて共有するためではないか。

ここで一度、「ディズニーシー」に行った A2 氏と A3 氏のやりとりを振り返りたい。ディズニーシーは、六本木ヒルズに行った A6 氏の言葉を借りれば「コマーシャル」で商業主義的な価値観に基づいた場所ととることもできる。また、A2 氏と A3 氏が従事していた運動が反グローバリズム運動であったことを考慮すると、グローバル化を推進するディズニーシーに行くという振る舞いも揶揄されたり、嘲笑される可能性は十二分にある。しかし A2 氏と A3 氏は、「真面目」ではなく、ある意味で「適当」に運動に臨んでいるから、反グローバリズムを唱えつつディズニーシーに行ってもいいということになる。このように、既存の価値観や社会システムに対抗しようにも、既存の価値観や社会システムの捉え方、社会運動に対する志向がそれぞれの担い手によって異なるという実情が、社会運動従事者たちの「旅」における規範や定型を形作っているのではないか。

観光研究は社会の個人化・流動化状況を踏まえて、それに即した観光の変容状況を捉えている。例えば岡本亮輔は、「宗教が社会全体の価値観を支配していた前時代的な状況から、私的な領域に囲い込まれていく」（岡本 2015: 16）という表現を用いて、宗教が個人によってカスタマイズされる状況を「宗教の私事化」として論じている。社会運動従事者にとっての政治も同様に解釈できはしないか。第二節で筆者は、McDonald の経験運動論を検討しながら、出自も背景も異なる人々が同じ運動に参加する状況では、既に同じ目的や組織を前提とした社会運動がもはや存在しえないこと、だからこそプロテスト・キャンプが「経験の共有をする場」となっていることを示した。宗教とともに政治も私事化しているからこそ、社会運動はごく私的な生活の中で起こる。私事化され個人化された中では、社会運動のあり方も何を運動とするかも人によって異なり、反グローバリズムを支持していても、ディズニーシーや六本木ヒルズに行くかどうかは人それぞれなのである。

では、共通の目的や利害をなくし、個人化・流動化した社会における運動従事者たちは、なぜ「旅」をするのだろうか。ここでも、岡本亮輔の知見が有益である。岡本は、聖なる物を前にして祈るということがなくなった現代の「巡礼」は、そのプロセスや交流を重視すると論じた（岡本 2012, 2015）。日常において細分化された価値観や倫理観を共有する者どうしが、改めて「つながり」「交流」する場、それが巡礼路なのである。つまり聖地巡礼とは、個人化され、細分化された価値観を持つ人々が、同じ信仰を持つはずの人々とつながるための旅なのだ。この知見もまた、社会運動従事者たちの移動におけるツーリスティックな側面を分析する上で応

用可能だろう。McDonaldの対象化した、個人化し、流動化したプロテスト・キャンプの参加者たちは、キャンプという場を通じてお互いの経験を共有し理解しあい、そこではじめて連帯することを可能にする。それと同じく、社会運動従事者たちの「旅」は、それぞれ違う動機や目的に基づきつつも、旅先での相互行為によって「望ましい旅」「そうでない旅」へと弁別されていく。彼らは旅の過程で「逸脱の作法」や「対抗の作法」を共有しながら、再度他者と連帯しようとする。それは、統一された目的や利害を持ち得ない人々が、個人化・流動化した社会の中でもう一度連帯を自らの手で作ろうとする営みだと考えられる。

注

- 1) A1氏インタビュー，於北海道札幌市，2010年5月24日。
- 2) 同上。
- 3) 同上。
- 4) A8氏参考聞き取り，於北海道札幌市，2017年4月25日。
- 5) A9氏参考聞き取り，於東京都品川区，2014年2月3日。
- 6) シェアハウス「りべるたん」Twitter, https://twitter.com/libertine_i, 2017年8月10日最終アクセス。
- 7) シェアハウス「スキマハウス」Twitter, <https://twitter.com/sukimahouse>, 2017年8月10日最終アクセス。
- 8) A2氏・A3氏インタビュー，於北海道札幌市，2010年8月11日。
- 9) 同上。
- 10) A4氏・A10氏・A11氏インタビュー，於北海道札幌市，2012年11月25日。
- 11) A5氏インタビュー，2010年8月18日，於北海道札幌市。
- 12) 「Infoshop」, <http://www.infoshop.org/> (2017年7月10日最終アクセス)
- 13) 「TOKYO なんとか」, <http://keita.trio4.nobody.jp/tokyonantoka/index.html> (2017年7月10日最終アクセス) 最終刊行は2012年であり，2017年現在は休刊中と考えられる。
- 14) A6氏・A7氏インタビュー，於東京都豊島区，2016年6月25日。
- 15) A12氏インタビュー，於東京都新宿区，2010年4月4日。
- 16) A10氏・A11氏・A13氏インタビュー，於北海道札幌市，2012年11月25日。

参考文献

- Cohen, E. 1987, "Alternative Tourism: A Critique", *Tourism Recreation Research* 12 (2): 13-18.
- Cohen, E. 2003, "Backpacking: Diversity and Change", *Journal of Tourism and Cultural Change* 1 (2): 95-110.
- Feigenbaum, A., Frenzel, F., & McCurdy, P. 2013, *Protest Camps*, London: Zed Books.
- Frenzel, F. 2014, "Slum Tourism and Urban Regeneration: Touring Inner Johannesburg", *Urban Forum* 25 (4): 431-447.
- Gerbaudo, P. 2012, *Tweets and the Streets: Social Media and Contemporary Activism*, London: Pluto Press.
- Glass, P. 2010, "Everyday Routines in Free Spaces: Explaining the Persistence of the Zapatistas in Los Angeles", *Mobilization* 15: 199-216.
- Graeber, D. 2009, *Direct action: An Ethnography*, Oakland: AK Press.
- Harvie, D., Milburn, K., Trott, B., & Watts, D. (Eds.) 2005, *Shut Them Down!: The G8, Gleneagles 2005 and the Movement of Movements*. New York, NY: Autonomedia.
- Higuchi, T. 2012, "Global Activist Network Involving Asia: Global Continuation and Evolution in Japan" *Inter-Asia Cultural Studies* 13, 467-475.

- 神長恒一・ベベ長谷川 (2000). 『だめ連の働かないで生きるには?!』 筑摩書房.
- Kanter, R. M. 1973, *Commitment and Community: Communes and Utopias in Sociological Perspective*, Cambridge, Harvard University Press.
- 国際交流インフォセンター・キャンプ札幌実行委員会 (2008). 『洞爺湖サミット 国際交流インフォセンター／キャンプ (札幌・当別) 報告集 オルタナティヴ・ヴィレッジ 私たちの小さな村のこころみ』 国際交流インフォセンター／キャンプ札幌実行委員会.
- 増井真琴 (2015). りべるたんで会おう! (1) りべるたんとは何か『情況 第四期』4 (6), 19-21
- McCurdy, P., Feigenbaum, A., & Frenzel, F. 2015, "Protest Camps and Repertoires of Contention", Retrieved August 10, 2015, from *Social Movement Studies Website* <http://www.tandfonline.com/doi/pdf/10.1080/14742837.2015.1037263>
- McDonald, K. 2006, *Global Movements: Action and Culture*, Hoboken, NJ: Wiley-Blackwell.
- 松本哉 (2016). 『世界マスケ反乱の手引書——ふざけた場所の作り方』 筑摩書房.
- 松本哉 (2008). 『貧乏人の逆襲! ——タダで生きる方法』 筑摩書房.
- Melucci, A. 1985, "The Symbolic Challenge of Contemporary Movements", *Social Research: An International Quarterly* 52 (4): 789-816.
- 成田佳祐 (2008). 随感随筆ドイツ反G8『アナキズム』10, 54-73
- 岡本亮輔 (2012). 『聖地と祈りの宗教社会学——巡礼ツーリズムが生み出す共同性』 春風社.
- 岡本亮輔 (2015). 『聖地巡礼——世界遺産からアニメの舞台まで』 中公新書.
- 大野哲也 (2007). 商品化される「冒険」——アジアにおける日本人バックパッカーの「自分探し」の旅という経験『社会学評論』58 (3), 268-285.
- 大野哲也 (2012). 『旅を生きる人びと——バックパッカーの人類学』 世界思想社.
- Pearce, P. 1990, *The Backpacker Phenomenon: Preliminary Answers to Basic Questions*, North Queensland: James Cook University.
- Rolfes, M., Steinbrink, M., & Uhl, C. 2009, *Townships as Attraction: An Empirical Study of Township Tourism in Cape Town*, Potsdam: Universitätsverl.
- 杉村昌昭・境毅・村澤真保呂 (2016). 『既成概念をぶち壊せ!』 晃洋書房.
- 高田昭彦 (1986). 青年によるアイデンティティ探求と“もう1つの”社会の形成——60年代青年の求めたライフ・スタイル——『成蹊大学文学部紀要』(22), 16-64
- Ting, A. E. and Kahl, C. 2016, "Self Discovery and Backpackers: A conceptual paper about liminal experience", *International Journal of Religious Tourism and Pilgrimage* 4 (1): 49-58.
- Tominaga, K. 2017, "Social Reproduction and the Limitations of Protest Camps: Openness and Exclusion of Social Movements in Japan", *Social Movement Studies* 16 (3): 269-282.
- 富永京子 (2016). 『社会運動のサブカルチャー化——G8 サミット抗議行動の経験分析』 せりか書房.
- Wood, L. J. 2012, *Direct Action, Deliberation, and Diffusion: Collective Action after the WTO Protests in Seattle*, Cambridge: Cambridge University Press.
- 山口誠 (2010). 『ニッポンの海外旅行——若者と観光メディアの50年史』 筑摩書房.

【謝辞】本研究は、立命館大学国際言語文化研究所2016年萌芽プロジェクト「熟議と文化」、2017年萌芽プロジェクト「国際政治と移動」、日本学術振興会科学研究費（若手研究B, 2015-2017年度）、立命館大学産業社会学部共同研究プロジェクト（2016年）の支援を受けている。この場を借りて心よりの感謝を示したい。